

14 説明文を読もう ～「伝え合い」～

説明文の読解においては、形式段落ごとにその要点を的確にとらえて要約し、同時に段落の構成や論理の展開を考えながら、文章全体の要旨をまとめていく力が求められる。ところがJ S L生徒にとって、在籍学級で一般の生徒たちと同じように要約することは非常に困難である。よって、ここでは要約文を先に示すことで、対象生徒に要約することの意味や過程、その方法を理解させる逆方向からの個別支援を提案する。それを繰り返す中で、徐々に要約する力を定着させたい。また、長文の内容の理解が困難な生徒にとっても、簡略化された要約文は、当然ながら文章全体の内容把握や筆者の意見を理解する上での手がかりとなる。在籍学級で全員が同じワークシートを使いながらも、対象生徒への個別の課題設定や支援が可能となる工夫や授業展開が必要である。

1 領 域 読むこと

2 教 材 「伝え合い」(西江雅之 「国語2」光村図書)

ワークシート3枚(①～③)

- ①意味段落Ⅰ 形式段落①～⑤ごとの本文 要点 見出しの書き込み
②意味段落Ⅱ 形式段落⑥～⑨ごとの本文 キーワード・要旨の書き込み
意味段落Ⅱの全体要約
③意味段落Ⅲ・Ⅳ 形式段落⑩～⑫・⑬の本文 キーワード・要旨の書き込み
全体の段落構成 意味段落の見出し 発展課題

3 目 標

【J N L生徒の目標】

- ・説明文の各段落の要旨をつかみ、文章の内容が理解できる。
- ・形式段落、および意味段落の要約文、および見出しが書ける。
- ・説明文全体の段落の構成が理解できる。

【J S L生徒の目標】

- ・説明文の各段落の要約文から、要旨をつかみ、本文の内容が理解できる。
- ・要約文と本文を対照しながら、キーワード、キーセンテンスを見つけだし、要約のしかたのパターンが分かる。

4 指導時間 4時間

5 指導形態 在籍学級での一斉指導と個別指導(入り込みによるT T指導が望ましい)

6 指導事項 ・ 言語スキル

領域	指導事項	言語スキル
読む こと	<p>【内容把握や要約】</p> <ul style="list-style-type: none"> 文章の展開に即して内容をとらえる。 <p>【構成や展開】</p> <ul style="list-style-type: none"> 文章の構成や展開を正確にとらえる。 <p>【主題や要旨と意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> 文章の展開を確かめながら主題を考えたり、要旨をとらえたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> キーワード、キーセンテンスが理解できる。 段落ごとの要点が把握できる。 文章の中心の部分と付加的な部分の読み分けができる。 事実と意見の読み分けができる。 各段落（形式段落・意味段落）の要約ができる。 論理の構成が理解できる。
言語 事項	<p>【話や文章、文】</p> <ul style="list-style-type: none"> 段落の役割や文と文との接続関係を理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> 説明的な文章に於いて、接続関係に注意して文章構成をとらえ、要旨を考えることができる。

7 指導計画

	学習活動	伸ばしたい言語スキル	学習支援・指導・学習材
1 次 0 5 時 間	<p>○「伝え合い」を読む。 （教師の範読）</p> <ul style="list-style-type: none"> 意味段落に分ける。 4つの意味段落Ⅰ～Ⅳを確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> 段落の書き出し、場面や話題の転換から、文章の切れ目に気付くことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 意味段落については事前に取り出し授業でおさえておく。 教師の範読の前に、意味段落に分けることを伝え、話題の転換や書き出しの表現に注目させる。 ★ふりがな付き本文のプリントを渡す（又はワークシート①を先に渡す）。
2 次 3 時 間	<p>○意味段落Ⅰ（形式①～⑤）の内容と構成をつかむ。</p> <ul style="list-style-type: none"> 意味段落Ⅰを読む。 形式段落ごとに要約する。 	<ul style="list-style-type: none"> 明瞭に正しく音読できる。 キーワード、キーセンテンスを見つけて、文にまとめられる。 	<ul style="list-style-type: none"> ワークシート①を渡す。 ★ふりがな付きのワークシート①を渡す。 ★語彙の説明、補足 ★要約できない場合は、要約文の入ったワークシートを渡し、本文の該当部分にアンダーラインを引かせ、要約の過程を説明し、「要約する」ことの意味を理解させる。 ★改めてアンダーラインの部分を示しそれらをつないで要約文を書か

<ul style="list-style-type: none"> ・要約文を発表し、交流する。 ・さらに要約文から、見出し(タイトル)を付ける。 ・見出し(タイトル)を発表し、級友と評価、交流しあう。 ・重要な段落とそうでない段落に分け、段落の相互の関係、役割を考える。 ・対比的な語句や段落をとらえる。 ・意味段落Ⅰ全体の見出しを考える(発表、交流)。 	<ul style="list-style-type: none"> ・要約文からのキーワードや言葉の言い換え(名詞化)で見出しを考えられる。 ・「事実(具体例)」と「意見」の区別ができる。 ・段落の関係、役割を考えられる。 ・筆者の論理の展開をとらえ意味段落全体の要旨をつかみ、全体の見出しが考えられる。 	<p>せてみる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ★困難な場合は再度要約文を見せ、写させる。 ★要約文を黒板に掲示する(あらかじめ書いたカードを貼付して視覚化する)。 ★板書のように書き込んでいるか確かめ、適宜指導する。 ★キーワード等助言する。 ・見出しをワークシートに書き込む。 ・見出しを板書する(視覚化する)。 ★黒板掲示の要約文を使って確認し、矢印や線を引き、色別にして段落の構成を視覚化する。 ・自分のワークシートにも矢印や傍線を引き視覚化する。
<p>○意味段落Ⅱ(形式⑥～⑨)の内容と論理の展開をつかむ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・意味段落Ⅱを読む。 ・発問やワークシートに沿って、書き込み、論理の展開と内容を理解する。 ・意味段落Ⅱ全体の要約文を書く。 ・要約文の発表、交流 ・意味段落Ⅱの見出しを考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・明瞭に正しく音読できる。 ・キーワード、キーセンテンスを見つける。 ・各形式段落のキーワードやキーセンテンスをつないで、意味段落全体の要約文が書ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシート②を渡す。 ★ふりがな付きのワークシート②を渡す。 ★語彙の説明、補足 ★ワークシートへの書き込みを援助する。 ・要約文、キーワードを書き込む。 ★できない場合は、要約文例を教師から提示し、要約の過程をたどらせて要約文の形を示す。 ★今度は提示した要約文例を見せずに、再度書かせてみる。 ★できなければ写させる。 ・正答は一斉の発問でその都度確認する。 ・ワークシートに書き込まれたキーワードキーセンテンスをつなぐことで、要約文を完成できることを助言する。 ・発表し、評価、交流し合う。

	学習活動	伸ばしたい言語スキル	学習支援・指導・学習材
	○意味段落Ⅲ⑩～⑬の内容と論理の展開をつかむ。	(省略)	・ワークシート③を渡す。 (省略・Ⅱと同じような過程を行う)
	○結論の段落⑬から筆者の考えをとらえる。	・キーセンテンスを見つけられる。	・二つの文のうち、どちらが筆者の考えかを選び、書き写す(ワークシート③)。
3 次 0 ・ 5 時 間	○文章全体の段落構成と内容をふり返る。	・段落ごとに「事実」中心か「意見」中心のどちらで記述されているかを確認、見出しとともに整理する(区別できない段落もあることにも気付く)。	・ワークシート③に意味段落の見出しを書き写す。 ・意味段落の見出しを黒板に掲示し、論理の展開と筆者の主張を整理する。 ★視覚化して、意味段落の構成と筆者の主張につながる展開をとらえさせる。

※①～③の「形式段落」を「内容のまとまり(意味段落)」から、いくつかに分けてみよう。

I	(①)
II	()
III	()
IV	(⑬)

I 全体の見出し(タイトル)

① 一九六〇年代に入ったばかりのころの話だが、北東アフリカのソマリアという国の奥地で、わたしには一切分からない言葉を話す数人の青年に行き会ったことがある。彼らは何族の者なのかはおろか、視界が十分にきくその砂漠の中の、いったいどこから忽然とわき出てきたのかすら分からなかった。気が付いてみたら、角ばった顔をした精悍な裸体の黒人が手に手に槍を持って、まるで冒険映画の一シーンそのままにわたしを取り囲んで、口々に何か言っていた。

② しかし、それでもわたしは恐ろしくもなかったし、危機感も抱かなかった。そうかといって、その初対面の砂漠の男たちに特別な親しみを感じたというわけではもちろんない。ただ、少なくとも不安感のようなものはもたなかったように思う。簡単なあいさつを顔や動作で交わしたあと、わたしは彼らの移動小屋までついていき、そこで羊の脚肉を食べさせてもらったり、ラクダのミルクを飲ませてもらったたりした。

③ そのときに、その場で出会った一人の老人の言葉が、妙に印象深くわたしの頭に残っている。老人はイタリア語を少々話し、彼だけがわたしとは言葉が通じた。そこで、その老人は、青年たちとわたしの間を取りもつ役割を果たしてくれることになった。

「ところで、あなたの住んでいたところには羊がいるかね。」
砂漠の上にごみくずのように散らばる十数頭の羊以外には、食べられそうな物は青草一本見えないやせた大地の上で、老人はぽつりとわたしに尋ねた。

「いや、日本というところには羊はほとんどいませんよ。」
わたしは、老人の質問をそれほど深く考えずにこう答えた。

④ 老人はその言葉を、わたしが知らない言葉に訳して周囲の人々に伝えた。すると、そこに集まっていた人々が、急に何やら心配そうな表情で、ごそごそと話し合いを始めたのだった。あとになって分かったことだが、そこでは羊だけがほぼ唯一の食べ物であってみれば、羊がいらないという答えは、食べ物がなくなってしまうという意味そのものとなる。彼らは、わたしがすでに食料の尽きた故郷を捨てて、その土地まで流れてきたと思ったのだった。

⑤ 考えてみれば、その人々との間に、普通ならば生じるはずがなかった誤解を、わたしは知らずに与えてしまっていたのである。

※ I の形式段落のなかで、筆者が言いたいことにつながる重要な段落に◎を付けよう。また◎の付かない段落は、◎の付いた段落とどのような関係になっているのだろうか。

※大切なところを残し、つないで簡単にまとめると(要約すると)

※さらに短くタイトルを付けると

①

①

②

②

③

③

④

④

⑤

⑤

Ⅱ 全体の見出し (タイトル)

⑥ 今わたしは、久しぶりにアフリカの現代的な都会にいる。現在のナイロビのような大都会では、ケニア国内のみか、他国からの人々も含むと百以上もの異なった人間集団の出身者が、おのおのの風俗習慣をそのままに残しながらも、言語だけはスワヒリ語や英語という共通語に頼って日常を送っている。すなわち、彼らはお互いに通じ合う共通の言語というものをもって

⑦ だが、その様子を見ると、いつもわたしがい出し出すのは、ソマリアで世話になったあの青年たちや老人との出会いでもった会話なのである。

⑧ 伝統的な衣装や化粧、特定のジェスチャーなどの異なりは外から見える。大都会の中でも、そうした部分に関しては、お互いに相手の違いが読めて、意思の伝え合いにはそれほど支障を来さない。

⑨ しかし、おのおのの集団には、それなりのものの考え方、判断のしかたのような、外見からはおよそ見当が付かない心中の問題というのがある。こうした部分もまた、この大都会では、その異なりが同じ言語で相手に表現されてしまうことになる。そうすると、言葉が通じるだけに、かえって相手の心も自分の心と同じと思いついてしまうことになり、お互いに誤解を生み、理由もなしに悩み事を大きくしたり、相手を傷つけたりするということになってしまう。

簡単にまとめると (要約すると)

「その様子」 (思い出)
ソマリアで出会った青年たちや老人との会話と同じこと

お互いに通じ合う共通の

「衣装や化粧、特定のジェスチャーの異なり」

異なり (ちがひ)

お互いの違いが読める (支障はない)

「ものの考え方・判断のしかた」

|| 「」

異なり (ちがひ)

それが、同じ言語で相手に表現される (言葉が通じてしまう)

かえって

相手の心も自分の心と同じと思いついて

(それがために・その結果)

お互いに「」を生み、「」を大きくしたり、相手を「」てしまう

Ⅱの意味段落の全体から筆者が言いたいことをまとめてみよう。(意味段落の全体要約)

Empty box for summarizing the main point of the text.

※ヒント 右の [] や太字の言葉を使って、まとめてみよう。

Ⅲ 全体の見出し (タイトル)

⑩ こんなことがある。海岸地帯から来た人々の中には、慣習上、他人に何かをしてあげて、「ありがとう。」と言う者がいるというところは、そういう行為をしてくれた相手が、英語なりスワヒリ語なりで「ありがとう。」と言わなければ、受け手は与え手のことを、ちよつと変わった人物だと評価してもよいというところもある。ところが、わたしたちの属している世界での事態はその逆だ。何かをしてもらったほうが、「ありがとう。」と言う。そして、そう言うことは人間として当然のことであると決めつけている。

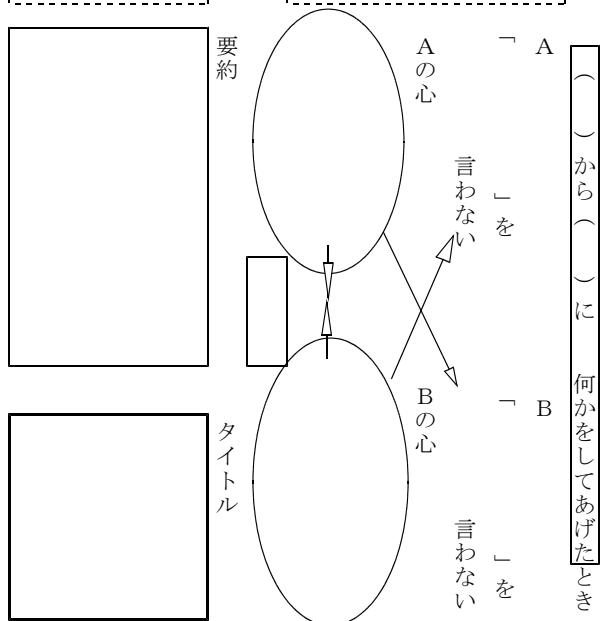
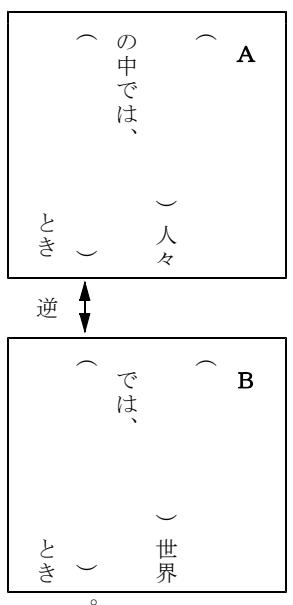
⑪ 親しい人に何かをしてあげたとき、その相手が「ありがとう。」のひと言も言わずにいたならば、わたしたちが属す世界の人は、「なんだ。こいつはそんな程度のやつだったか。なんて礼儀知らずなんだ。」と、思い込んでしまうということになりかねない。だが、そのとき、相手も心の中では、「何かをしておいて感謝の言葉も出ないとは……。」とあきれ、がっかりしているかもしれないのだ。

⑫ 海岸地帯から来た人々にとつても、例えば、人に物を与えることは善行である。しかし、もし相手がそれを受け取ることが拒否したら、どうしてその善行が可能となるだろうか。まさに「もらってくれてありがとう。」と、彼らは相手を前にして、そのような善き機会を与えてくれた神に感謝するのである。

Ⅳ
⑬ 異なった世界に属す人々が同じ言葉で話す。これは一見したところはすばらしい。だが実際には、言葉が通じてしまうからこそ単純な事柄が複雑な事態となってしまうことも、ごく普通にあるようだ。

※ (発展課題)

「複雑な事態」にならないためには、どうすることが必要だろうか。この文章では、筆者はそのことまでは書いていない。⑬段落につづけて、あなたの考えを付け加えなさい。



簡単にまとめよう。

(段落の構成・つながり)

I	【	① ② 事実	・	③ ④ 事実	・	⑤ 意見(まとめ)	】
II	【	⑥ 事実	・	⑦ ⑧ ⑨ 意見	・		】
III	【	⑩ ⑪ ⑫ 事実と意見	・		・		】
IV	【	⑬ (筆者の主張・全体のまとめ)	・		・		】

※①～③の「形式段落」を「内容のまとまり（意味段落）」から、いくつかに分けてみよう。

I	(①)
II	(⑥)
III	(⑩)
IV	(⑬)

I 全体の見出し（タイトル）

「言葉による伝え合いが誤解を生んだ（ソマリアでの）体験」

① 一九六〇年代に入ったばかりのころの話だが、北東アフリカのソマリアという国の奥地で、わたしには一切分からない言葉を話す数人の青年に行き会ったことがある。彼らは何族の者なのかはおろか、視界が十分にきくその砂漠の中の、いったいどこから忽然とわき出てきたのかすら分からなかった。気が付いてみたら、角ばった顔をした精悍な裸体の黒人が手に手に銃を持って、まるで冒険映画の一シーンそのままにわたしを取り囲んで、口々に何か言っていた。

② しかし、それでもわたしは恐ろしくもなかったし、危機感も抱かなかった。そうかといって、その初対面の砂漠の男たちに特別な親しみを感じたというわけではもちろんない。ただ、少なくとも不安感のようなものはもたなかったように思う。簡単なあいさつを顔や動作で交わしたあと、わたしは彼らの移動小屋までついていき、そこで羊の脚肉を食べさせてもらった。ラクダのミルクを飲ませてもらった。

③ そのときに、その場で出会った一人の老人の言葉が、妙に印象深くわたしの頭に残っている。老人はイタリア語を少々話し、彼だけがわたしとは言葉が通じた。そこで、その老人は、青年たちとわたしの間を取りもつ役割を果たしてくれることになった。

「ところで、あなたの住んでいたところには羊がいるかね。」砂漠の上にごみくずのように散らばる十数頭の羊以外には、食べられそうな物は青草一本見えないやせた大地の上で、老人はほつりとわたしに尋ねた。

「いや、日本というところには羊はほとんどいませんよ。」わたしは、老人の質問をそれほど深く考えずにこう答えた。

④ 老人はその言葉を、わたしが知らない言葉に訳して周囲の人々に伝えた。すると、そこに集まっていた人々が、急に何やら心配そうな表情で、こそごと話し合いを始めたのだった。あとになって分かったことだが、そこでは羊だけがほぼ唯一の食べ物であってみれば、羊がいらないという答えは、食べ物がなくなってしまうという意味そのものとなる。彼らは、わたしがすでに食料の尽きた故郷を捨てて、その土地まで流れしてきたと思ったのだった。

⑤ 考えてみれば、その人々との間に、普通ならば生じるはずがなかった誤解を、わたしは知らずに与えてしまったのである。

※ I の形式段落のなかで、筆者が言いたいことにつながる重要な段落に◎を付けよう。また◎の付かない段落は、◎の付いた段落とどのような関係になっているのだろうか。

※大切なところを残し、つないで簡単にまとめると（要約すると）

① 一九六〇年代のころ、わたしはソマリアで、一切分からない言葉を話す数人の青年に会った。

① ソマリアの砂漠に住む人々との出会い

② ・（不安に思うことはなく）わたしは彼らと簡単なあいさつを顔や動作で交わしたあと、羊の肉やラクダのミルクをこちそうになった。

② 顔や動作によるコミュニケーション（伝え合い）

③ ・言葉の通じる老人に「（日本には）羊がいるか。」と尋ねられ、わたしは、「羊はほとんどいない。」と答えた。

③ 言葉の通じる老人との会話（コミュニケーション）

④ 老人がわたしの答えを周囲の人々に伝えると、急に心配そうに話し合いを始めた。

④ 「羊がいらない」という言葉の意味の違い

⑤ ・（言葉が通じるにもかかわらず）誤解を、わたしは知らずに与えてしまった。

⑤ 与えてしまった（言葉による）誤解

Ⅱ 全体の見出し (タイトル)

【共通の言語が生み出す誤解の体験 (問題)】

⑥ 今わたしは、久しぶりにアフリカの現代的な都会にいる。現在のナイロビのような大都会では、ケニア国内のみか、他国からの人々も含むと百以上の異なった人間集団の出身者が、おのおのの風俗習慣をそのままに残しながらも、言語だけはスワヒリ語や英語という共通語に頼って日常を送っている。すなわち、彼らはお互いに通じ合う共通の言語というものをもっている。

⑦ だが、その様子を見ると、いつもわたしがい出すが、ソマリアで世話になったあの青年たちや老人との出会いでもった会話なのである。

⑧ 伝統的な衣装や化粧、特定のジェスチャーなどの異なりは外から見える。大都会の中でも、そうした部分に関しては、お互いに相手の違いが読めて、意思の伝え合いにはそれほどの支障を来さない。

⑨ しかし、おのおのの集団には、それなりのものの考え方、判断のしかたのような、外見からはおよそ見当がつかない心の中の問題というのがある。こうした部分もまた、この大都会では、その異なりが同じ言語で相手に表現されてしまうこととなる。そうすると、言葉が通じるだけに、かえって相手の心も自分の心と同じと思いつつ、それがために、お互いに誤解を生み、理由もなしに悩み事を大きくしたり、相手を傷つけたりするということになってしまう。

簡単にまとめると (要約すると)

ナイロビのような大都会では、百以上の異なった人間集団の出身者が、おのおのの風俗習慣を残しながらお互いに通じ合う共通の言語をもっている。

お互いに通じ合う共通の言語 (言葉)

「その様子」 (思い出)

ソマリアで出会った青年たちや老人との会話と同じこと

「衣装や化粧、特定のジェスチャーの異なり」

外から見える 異なり (ちがひ)

お互いの違いが読める (支障はない)

「ものの考え方・判断のしかた」

「心の中の問題」

外見から見当がつかない 異なり (ちがひ)

それが、同じ言語で相手に表現される (言葉が通じてしまう)

かえって

相手の心も自分の心と同じと思いつつ

それがために・その結果

お互いに「誤解」を生み、「悩み事」を大きくしたり、相手を「傷つけて」てしまう

Ⅱ 意味段落の全体から筆者が言いたいことをまとめてみよう。(意味段落の全体要約)

お互いに通じ合う共通の言語 (言葉) があることによって、心の中の問題などの外から見えない異なり (ちがひ) が、同じ言葉で相手に表現されてしまい、かえって相手の心も自分の心と同じと思いつつ、それがために、お互いに誤解を生み、理由もなしに悩み事を大きくしたり、相手を傷つけたりすることになってしまう。

※ヒント 右の や太字の言葉を使って、まとめてみよう。

